

北海道のアイヌ語地名における形態 *us* の基本的意味について

On the Fundamental Signification of the Form *us* in Ainu Toponyms in Hokkaido

佐藤邦彦

Kunihiko SATO

キーワード

アイヌ語地名, 基本的意味

ainu toponym, fundamental signification

Abstract: The Ainu form “*us*”, often seen in toponyms in Hokkaido, is said to be the plural form of the verb of existence “*un*”, but in practice it shows variety in its meanings: “to abound”, “to always be in a place”, “to always do something”, “to attach something”, etc... This article attempts to find its fundamental signification, i.e., its constant semantic tendency under which all its meanings can be associated with each other. The observation of examples picked up from *Ainu Toponyms List* published by the Hokkaido Government, shows that most important in this word is the concept of “density of existence”, from which meanings like “abundance” and “frequent occurrence or constant existence” are derived, and to the latter its auxiliary-like use “to often do” is motivated. And by analysis of types of existing objects referred to in toponyms with “*us*” the author provisionally defines its fundamental signification as follows: to be an outstanding object which characterizes a place, being closely attached to, or being a part or attribute of, a place. An investigation of fundamental signification could also be of help in our understanding the basic idea working in the meaning change and in new word formation.

1. はじめに

1.1. アイヌ語の us

北海道のアイヌ語地名には、us という形を含むものが多く見られる。これは文法的には、存在を表す動詞 un の複数形とされているが、実際には単なる複数形としては説明困難な意味・用法も多い¹。存在動詞としての us は存在物を主語に、場所を目的語にとる他動詞である。(前者を X、後者を Y とすると)、合成名詞または名詞句の形をとった地名においては、

- ・ X-us-Y [X のある Y] (例: at-us-nay オヒョウニレの生えている川>厚志内)
- ・ Y-us-X [Y にある X] (例: nutap-ka-us-pe 湿原の上にあるもの (=大雪山のこと)^{アツシナイ})

といった形で使われる。

上では便宜上「生えている」「ある」などの訳語を当てたが、実際には「群生する(多くある)」「いつもある」など場合によっていろいろな解釈が可能であり、また、存在動詞としての意味そのものに関してもさまざまな議論がある。本稿は、このような us がとくに地名に現れる場合の、動詞としての意味・用法全般を包括する「基本的意味」を探ることを目的とする。地名を対象とするのは、地名という形で定着したある程度古い意味の基本概念を探ることが、現行の生きた意味・用法を考える上でも重要だと考えるからである(5. で再び触れる)。

1.2. 基本的意味とは

基本的意味に関する筆者の考え方は佐藤(邦)(1997)で論じている。ここではその概略だけを述べておく。これは Saussure や Hjelmslev の言語体系観に基づくもので、それぞれの語が、体系上有する一定の価値として独自の 1 つの意味を持つはずだ、という考え方である。といっても基本的意味は、多義性を否定して主張される「唯一の語義」でもなければ、また複数の語義を代表する中心義とか、すべての語義に共通する意味素性のようなものでもない。基本的意味はむしろ、個別具体的な語義の背後にあって、語の意味の流動性に一定の方向付けを与えている要因である。抽象的な議論はさておき、とりあえずここでは、「語の多様な意味全般を包括する、その語独自の意味傾向」というふうにつけておきたい。

2. 辞書における記述

まずは辞書等における us の記述を確認しておこう。ちなみに、以下に紹介する辞書記述はいずれも、筆者の要約を経たものである²。

知里(1956b)の us の項では、①「そこに群材する」(例: Kito-~ -nupuri 「ギョー جانニクが・そこに群生している・山」、Chise-soy-~ -kina 「家・の外・に群生している・草」、②「群在する」あるいは「密集する」ような印象を与えるばあいを表す」(例: upar ~すすだらけである)、③「(動詞の後について)いつもそこでその動作が行われることを示す」(例: Kito-ta-~ -nay いつもそこでギョー جانニクを掘る沢)、の 3 つの語義が挙げられている。

同書は、us に「もの・所」を表す接尾辞 i が付いた -usi という形式も見出しに挙げている: ①「名詞 + usi」(a)「…が・そこに群在(生, 居)する・所」(例: Kina-~ ガマ(或いはスゲ)が群生している所)、(b)「…が・そこにいつもある(いる)・所」(例: Sine-sunku-~ 一本の・エゾマツが・そこにいつもある・所)、②「動詞 + usi」(c)「…し・つけている・所」(例: Kina-cha-~ ガマ(或いはスゲ)を・刈り・つけている・所)、(d) ただ「場所」の意に用いられたもの。

地名での用法に特化したもの以外では、中川 (1995) は、①「～につく、～についている、～に生える」(例: *karimpa us ku* サクラ皮を巻いた弓, *sinrus us* コケが生える)、②「～をはく」(例: *pirakka us* 下駄をはく)、田村 (1996) は、「(ももひき、スカート、靴など)をはく」(例: *omompe us* ももひきをはく)、「(…に) …がつく/生える、ついて/生えている」(例: *ham us* (木に) 葉がつく, *rek us* (人に) ひげが生える)、といった語義と例を挙げている (ただし田村では「はく」と「つく」とは別見出し下で扱われている)。

これらの記述からは、おおむね「ある場所に付いて存在する」のような意味を共通して見てとれるが、存在動詞としての意味については中川や田村の記述は知里ほど細分化されておらず、その反面「はく」のような語義が知里では触れられていないなど、内容にばらつきがある。*us* の意味がそれなりの広がりを持つことは予想できるが、それらの間の関連性や全体にわたる意味傾向はどのように捉えるべきであろうか。

3. 『地名リスト』掲載の地名の検証

まず、*us* を含むとされる地名において上記の語義がどの程度まで確認できるか見てみたいのだが、地名の中にはその語源や解釈 (いわゆる地名解) が確定していないものが多い。そこで今回は北海道環境生活部編 (2007) 『アイヌ語地名リスト』 (以下『リスト』と称する) を利用する。掲載地名数はあまり多くないが、従来の代表的な地名研究・記述を検討して地名解を探り、確定度まで出しているの信頼性は高いと思われる。この中の確定度 A または B のものを中心に、*us* を含むとされる例をしてみることにする (ランク C であっても、地名解の複数の候補が余りかけ離れておらず *us* の用法の解釈において揺れがないものは一部取り上げることにする)³。複数の地名解が示されているものについては、有力な (妥当性の高い) 候補が『リスト』中に提示されている場合にはそれに従うことにする。なお、同じアイヌ語名を語源とするものであっても異なる場所の地名である場合には複数の事例として勘定する (例: *e-sa-us-i* (頭が浜についているもの) > 江差 (桧山地方)・枝幸 (オホーツク地方))。逆に異なる地名であっても、同じ場所を示す一つの地名の派生形や意識などは合わせて 1 つとして勘定する (例: 歌志内 <*ota-us-nay* (砂浜がついている川) は勘定するが、これと同じ川の流域にある意識地名である「砂川」は別途勘定の対象にはしない、など)。

3.1. 『リスト』からの例の集計

上記の基準で『リスト』から拾い出した *us* の例は計 98 例である。それらにおいて *us* がどの意味で用いられているかを見ていくために、本稿 2. で見た辞書記述を参考にいくつかの語義を想定してみたのだが、実際には知里 (1956b) の②に確実に該当しそうな地名例は見当たらなかった。便宜上 [1]《群在》(「多くある・複数ある」などをすべて含む)、[2]「いつもある」、[3]「いつも～する」、[4]「つける」、の語義を想定した。その上で、実際には主語 (存在物) が単数もしくは単複不明の場合もあるため、結果的には語義 [0]「ある (単数または単複不明)」を追加することになった ([2] に分類したものはこれには含めていない)。

下記の一覧で () 内のものは異なる語義分類の可能性のあるもので、数は () 内のものを含めるか否かで変動している。なお紙幅の都合上、各アイヌ語地名の日本語訳を示すことはせず、*X-us-Y* [X のある Y]、*Y-us-X* [Y にある X] のいずれの場合も単純に [X_Y] という組み合わせを表記する。例えば *inaw-us-i* [木幣_所] とあれば「木幣のある所」の意味である⁴。ただし [3] に

分類される例については [X_Y] の X 部は「～する」という動詞句ということになる。なお、語形の切り出し方の問題で Y 部が現れていないものも一部含まれる。

◆語義 [0] 《ある》(単数または単複不明) 11 (10) 例 inaw-us-i [木幣^{イナウシ}所] > 稲牛, ka-us-nay [ワナ^{コウシュナイ}所] > 光殊内, kutek-us-i [鹿捕り^{オトシバ}柵^{シカオイ}所] > 鹿追, nu-us-pet [豊漁^{オキフシ}川] > 西別/虹別, o-ciw-us-pe [波^{オヤス}川尻] > 音標, o-ni-us-i [樹木^{ヤウスベツ}/立てた流木^{ウラシベツ}川尻] > 荻伏, o-ya-us-i [網^{オニシベツ}川尻] > 小安, onne-ya-us-pet [網^{オニシベツ}川] > 矢白別, panke/penke- nu-us" [豊漁^{オニシベツ}川] > パンケヌーシ/ペンケヌーシ, uray-us-pet [梁^{アツシナイ}川] > 浦士別ウラシベツ, ([0] または [1] : o-nu/ni-us-pet [豊漁/木^{アツシナイ}川] > 鬼志別)。

◆語義 [1] 《群在》59 (52) 例 at-us-nay [オヒョウニレ^{アイウシ}川] > 厚志内, ayusni-us-i [センの木^{チュウシ}所] > 愛牛, cisuye-us-i [アマニュー草^{ハリウス}所] > 忠志, haru-us-nay [食料(となる山菜等)^{アツベツ}沢] > 春志内, haru-us [食料^{アツベツ}所(沢)] > 張碓, has-us-pet [柴木^{アツベツ}川] > 厚別, hup-us-nay [トドマツ^{フツシナイ}川] > 布伏内, hup-us-nupuri [トドマツ^{カリバ}山] > フツシ, hup-us-nupuri [同左] > 風不死, karinpa-us-nupuri [サクラ^{ケンイチ}山] > 狩場, kene- (ni)- us-i [ハンノキ^{ケンニチ}所] > 見市/見日, kina-us-i [ガマ^{キナオン}所] > 木直, kina-us-nay [草^{キウスナイ}川] > 黄白内, kito-us-i [ギョージャニン^{キトウシ}ニク^{キトウシ}所] > 喜登牛, kito-us-nupuri [ギョージャニン^{キトウシ}ニク^{キトウシ}山] > 岐登牛, kito-us [ギョージャニン^{クマウシ}ニク^{クマウシ}] > 鬼斗牛, kuma-us-i [物干し^{クマウシ}柵^{クマウシ}所] > 熊牛 (× 2), kuma-us-i [同左] > 熊石, kuttar-us-i (イタドリ^{クッタリ}所) > 屈足, kuttar-usi-to/kuttar-us-i [同左] > 俱多楽湖/虎杖浜, maw (ni) -us-i-oro [ハマナス^{バンセイ}所] > 万世, nesko-us-i [クルミの木^{ネシコシ}所] > 根志越, ni-us-pet [木^{ニウシベツ}川] > 入志別, ninum/ni-us-pet [クルミの実/木^{ニウシベツ}川] > ニニシベツ, noya-us-i [ヨモギ^{ノヤウシ}所] > 農野牛, num/numa-us-horkanay [果実/毛 (=柳)^{オキキン}川 (ホロカナイ川)] > 沼牛, o-kikinni-us-nay [エゾノウミズザクラ^{モリ}川] > 雄木禽, o-kompu-us-pe [コンブ^{オオカリバ}川尻] > 黄金, o-ni-us-pet [木^{モリ}川尻] > 森, o-punkar-us-pe [ブドウの蔓^{オオカリバ}川尻] > 大狩部, o-shunku-us-i [エゾマツ^{オキキナウシ}川尻] > オシンコシン, o-sikina/kene/kikinni-us-i [ガマ/ハンノキ/ウワミズザクラ^{オキキナウシ}川尻] > 置杵牛, panke/penke-top-us-nay [竹^{ベカンベウシ}川] > パンケ/ペンケトプシ, pekanpe-us-i [ヒシ^{ヒバウシ}所(川)] > 別寒辺牛, pipa-us-i [カラス貝^{ヒバウシ}所(川)] > 美馬牛, pipa-us-i [同左] > 美葉牛, pipa-us-i [同左] > 美蔓, pirka-kina-us-i [ガマ^{ピマン}所(川)] > キナウシ, ranko-us-i [カツラ^{ランシ}所] > 蘭越 (× 2), sarki-us-i [ヨシ^{サルキウシ}所] > 去来牛, sarorun-us-i [鶴^{サルル}所(ヨシ原)] > 猿留, sas-us-i [コンブ^{サンウシ}所] > 刺牛, set-cir-us-i [巢鳥^{セツリ}所(川)] > 雪裡, sikutur-us-nay [エゾネギ^{シユクトクナイ}川] > 宿徳内, tat-us-i [カバの木^{タドシ}所(川)] > 多度志, tatni-us-nay [カバの木^{トクシベツ}川] > タツニウシナイ, top-us-pet [竹^{トクシベツ}川] > 徳志別, tup/top-us-i [ウグイ/竹^{トミブシ}所(川)] > 富武士, turep-us-rikunpet [オオウバユリ^{ウラウス}川 (陸別川)] > 烏布朱, uray-us-pet/nay [梁^{ウラウス}川] > 浦白, ([0] または [1] : o-nu/ni-us-pet [意味既述] > 鬼志別; [1] または [2] : inaw-us-i [木幣^{イナホ}所] > 稲穂, kapar-us-i [薄い岩^{カバリ}所] > 賀張, so-us-pet [滝^{ソウシュベツ}川] > 双珠別ソウシュベツ, tes-us-i [梁(のような岩盤)^{モセウシ}所] > 手塩; [1] または [3] : mose-us-i [イラクサ/草刈りする^{モセウシ}所] > 妹背牛, mose-us-i [同左] > 茂世丑)。

◆語義 [2] 《いつもある》13 (9) 例 e-sa-us-i [岸の突起部(岬)^{エサン}浜] > 江差, e-sa-us-i [同左] > 枝幸, kapar-us-i [平岩^{エサン}所(磯)] > 川白, nutap-ka-us-pe [もの(山)^{カワシラ}湿原の上] = 大雪山, o-pira-us-pet [崖^{オピラ}川尻] > 小平(薬), o-sar-us-nay [ヨシ原^{シバ}川尻] > 長流枝内, ota-us-nay [砂^{オサルシナイ}浜^{ウタシナイ}川] > 歌志内, pok-us-i [場所^{ホゴシ}崖の下] > 帆越, so-us-nay [滝^{ソウシュベツ}川] > 添牛内, ([1] または [2] : inaw-us-i > 稲穂, kapar-us-i > 賀張, so-us-pet > 双珠別, tes-us-i > 手塩 (いずれも意味既述))。

◆語義 [3] 《いつもする》21 (19) 例 at-kar-us-i [オヒョウニレの皮を取る^{アツカルウスナイ}所(川)] > 厚軽白内,

at-ke-us-i [あつし皮を剥ぐ_所] > 厚岸^{アツケン}, at-wor-us-nay [オヒョウニレの皮を水に浸す_川] > 厚田^{アツタ}, cep-pop-us-i [魚が跳ねる_所] > 仙鳳趾^{センボウシ}, cip-ranke-us-i [舟をおろす_所] > 重蘭窮^{チブランケウシ}, haru-ta-us-nay [食料を採る/掘る_沢] > 春立^{ハルタチ}, hetche-us-i [囃す_所] > 神楽^{カグラ}, i-ika-us-i [それを越える_所] > 伊香牛^{イカウシ}, i-oro-us-i [それ(木の皮など)を水につける_所] > 養老牛^{ヨウロウシ}, inkar-us-i [眺める_所] > 遠軽^{エンガル}, inkar-us-pe [同左] > 藻岩^{モイワ} (*本来の語源とは異なる地名と置換), inun-us-pet [魚捕りに滞在する_川] > 犬牛別^{イヌウシベツ}, mose-kar-us-nay [イラクサを刈る_川] > モセカルシュナイ, moyre-us-i [静かである_所(入り江)] > モイレウシ, rar-us-i [泳ぐ_所] > 良瑠石^{ラルイシ}, riya-us-to [越冬する_湖] > リヤウシ, terke-us-i [跳ねる_所] > 照岸^{テルキシ}, turi-tuye-us-i [舟の棹を切る_所] > 鳥通^{トリトウシ}, yas-us-i [網で魚をすくう_所] > 安牛^{ヤスウシ}, ([1] または [3] : mose-us-i [イラクサ/草刈りする_所] > 妹背牛^{モセウシ}, mose-us-i [同左] > 茂世丑^{モセウシ} (moseが「イラクサ」の意なら [1] に分類))。

◆ 語義 [3]'《する》1 例 aypi-kar-us-i [鮑を取る_所] > 歩古丹^{アユミコタン} (『リスト』では「いつも～」と明記されていないので [3]' としてみたが、鮑捕りが習慣的に行われている場所なのであれば [3] に含めてよいと思われる)。

(当初、『リスト』に示されている訳語と補足説明等に従って暫定的分類を試みたのだが、『群在』に相当するか否か(主語(存在物)が複数であるか否か)が『リスト』の記述から判別できない場合は、永田(1891)や山田(1994)の記述から複数であると判断しないしおおむね推察できた場合に [1] に含め、そうでない場合は [0] とした。また、『リスト』で明確に「いつもある」という訳語が付されたのは 1 例のみ(稲穂<inaw-us-i 木幣がいつも多くある所)だが、他にも岩盤・滝・岸・山などの地形物で事実上「いつもある」と解せるものは [2] に含めた。)

[1] の《群在》の例が圧倒的に多いの是一目瞭然だが、この点については単数・複数の問題との関連で後に触れる。なお、『つける』に相当する例は上記の集計には見られないが、これについても後に触れる。

3.2. 《常在》の意味について

知里(1956a)は *us* 本来の意味として《群在・群生》を強調しているが、これに合致しない Sine-sunku-us-i (1 本のエゾマツがある所) のような例については「いつもある」の意味だと説明している(pp. 221-5)。これがもし、《群在》の意味が成立しない場合には「いつもある」という語義を立てるといことであれば、切替(改稿 2005)の批判どおり、「つぎはぎの学説の印象は免れない」(p.5) ことになる。(知里の真意はどうあれ)《群在》の意味に合致しない場合という前提だと、「いつもある」の意味(以下《常在》と称す)は存在物が単数の場合か、複数であってもごく少数の場合に適用されることになるだろうが、実際はどうだろうか。

実は、上記集計で [2] に含めた地形物などの例だけでなく、[0] や [1] に含めたものの中にも固定的・恒常的な存在と捉えられる事例が多く含まれる。存在物が樹木などの植物の場合とはとくにそうだ。植物も永続的存在なわけではないが、移動する動物などに比べるとその場所での常在性が高いといえる。従って「(植物)が群生している所」の内容を持つ例は、《群在》かつ《常在》を表す例であり、《群在》の意味と矛盾しなくても《常在》の解釈は適用可能だということになる。また、漁・猟のためのワナのような設置物の類(ka-us-nay の ka ワナ, kutek-us-i の kutek 鹿捕り柵, o-ya-us-i の ya 網, uray-us-pet の uray 梁, など)も固定的な存在物と見ることもできなくない。ただ、どこまでを《常在》に含めるべきかの基準が持てなかったため、筆者は上記の集計に際してこの種の例は [2] に含めなかった。

とは言え、[2]に含めたもの以外にも《常在》か、それに類した意味で捉え得る例が相当数あることは間違いなさそうだ。ワナの類については、例えば特定の漁/猟期にある種のワナを仕掛けることが習慣となっているのであれば、「いつも～」と言わないまでも《習慣性》の意味を読み取ることは十分可能だろう⁵。従って、知里の言う「いつもある」という語義は十分妥当性があると思われるし、これはusが動詞に後接した時の「いつも～する」という意味にも当然関連することになる（これについては3.5.で再度触れる）。

3.3. 単数・複数の問題

今回取り上げた例の内[3]に分類したものの以外について、存在物の単数・複数による用例数を見ると、複数59(52)例、単数12(11)例、不明8例である(()内は、異なる解釈がある場合を除外した数。以下でも同様)。usが複数に大きく寄っているのは確かだが、単数の例も例外中の例外というほど少ないわけではない。また、上述の sine-sunku-us-i のように単数であることが明示されている例も気になる。

参考までに『リスト』記載の地名で、(usの単数形とされる)unを含むものについて単数・複数の分布を調べると、複数12(10)例、単数21(19)例、不明12(11)例である。unはusほど複数に寄っていないが、決して低くない率で複数の例もあることがわかる(単複の判断については3.1.で述べたのと同様)。単なる単複の問題ではないのは確かなようだ。知里(op.cit.)はunとusの関係は単なる文法的な単複ではないと考え、usについては《群在》の意味に重点を置くのだが、《群在》というからには複数なのが明らかで、むしろ《群在》の概念を強調すればするほど単複の問題の重みが増すという矛盾をはらむ。

そこで発想を変えて、そもそも単数が複数か特定できない、あるいは特定する必要がないような場合もあると考えてみてはどうだろうか。例えば、賀張・川白<kapar-us-i(平たい岩のある所)のkaparは、多数の扁岩を指すのか、扁岩の多い岩磯全体を1つの事物として指しているのか、いずれにも解釈可能である。歌志内<ota us nay(砂浜のついている川)のotaは「砂浜」と解すれば1つの事物と考えられるが、「砂」と解した場合には「砂が大量にある」という意味にも解釈できる。大量でも物質名詞的だから単数だとは言えるが、単純に「1つある」という意味とは異なるのも確かだ…。などいろいろ考えられるのだが、逆に言えばこのように理屈をつけて単数が複数かを特定する必要もないのかも知れないわけである。

逆に、単複が決定的な重要性を持つわけでないとしたら、un/us間にはとくに重要な差異はないということなのだろうか?例えば、unやusが古来から持っていた動詞としての意味が変化した結果、両者の差異が不明瞭になってきている、と考える可能性も否定はできない。実際、unやusは、動詞としての意味が希薄化した形式的要素としての面も持つ。

3.4. unとusの非動詞的機能

unやusの形式的機能については、すでに金田一・知里(1936)でも取り上げられている。同書は「形容詞語尾」を扱った節でun, usを取り上げ、unを「本来「はまっている」「ついている」意の動詞」、usはその複数形としつつも、rik(上)→rikun(上の)、asur(噂)→asurush(評判の)などの例とともにその形容詞化語尾としての機能を紹介している(pp.125-6:日本語の表記は現代風に改めてある)。中川(1995)と田村(1996)はともに、格助詞unを見出し語とし、「～へ」(中川)、「…にある/いる, …につく/ついている, (そこ)の, …出身の、(方向を表す)「～に/から」、(場所を表す)「～で」(田村)といった語義を挙げている。田村はさらに、動詞

us に基づく他動詞語根としての *us* や、動詞-*us-i* の形で「…する所/時」を表す接辞としての *us* を見出し語として挙げている。後に取り上げる動詞+*us* という形式にまで話を広げると、切替 (改稿 2004) はこの形式における *us* について、「修飾部と被修飾部の間に挿入される形式的な要素にすぎないのかもしれない」と述べている (p.16)。

このように *us* や *un* には、機能語もしくは形式的機能を持つ形態素としての側面もあるのだが、それらの機能に限って見ても、*un* のような方向性を表す格助詞のような用法は *us* にはなく、逆に、動詞-*us-i* で「～する所/時」のような形式名詞を形成する機能は *un* にはないなど、それなりの差異が存在している。ちなみに『リスト』から拾い出した *un* の例の中には、頓別^{トンベツ} *to-un-pet* (湖に入る川) など「入る」を意味する例が 5 例ある。動詞 *un* が持つこうした意味は、格助詞 *un* の方向性を表す意味とも関係していると思われる。田村 (op.cit.) における他動詞語根 *us* も「つく・生える」などを意味する動詞 *us* に基づいたものとされている。このように、*un* や *us* の形式的・機能的要素としての面においても、それぞれの動詞としての意味が深く関わっている。

3.5. 《存在密度》という観点

[0] や [1] に分類されたものについて再度考えてみよう。例えば *nu-us-pet* (豊漁のある川) における *nu* (豊漁) は、集計では抽象名詞ということで単数扱いにしたが、豊漁が一度限りでなく頻繁に起こるのであれば複数だと見ることもできる、つまり 3.2. で触れた常態性と関連する可能性がある。また、[1] には植物が存在物である例が多いが、植物は、その土地を特徴づける存在として認識される場合、大抵の場合そこに多く、そして (枯れない限り) いつも存在しているものとして捉えられている可能性がある。要するに、単数であれ複数であれ《よく遭遇する事物・よく生起する事象》という概念が重要なのではないだろうか。いわば《存在密度の高さ》ということで、これが空間的に捉えられれば「多くある」ということになり、時間的に捉えられれば「いつも・頻繁にある」ということになるわけである。

後者は当然 [3] の「いつも～する」の意味とも関連するが、[3] については、*us* を動詞に接続する助動詞として認めるか否かという問題がある。

切替 (1984) は、目的語+他動詞は自動詞的形式となり、主語を欠く自動詞的形式は名詞として用いられる、というアイヌ語の特性をもとに、合成名詞における疑似修飾構造を論じているが (この議論自体は切替 (op.cit.) を参照)、これをもとに切替 (改 2004) では、例えば *kito-ta-us-nay* (ギョウジャニンニクを掘りつけている沢) を「ギョウジャニンニクを掘ることがいつもある沢」のように捉える可能性もあることを示唆している (p.17)。要するに、*kito-ta* (ギョウジャニンニクを掘る) が目的語+他動詞で自動詞的形式となり、さらに「～すること」を意味する名詞として用いられるわけで、動詞句-*us*-名詞 (場所) 「いつも～する所」という形式は、名詞-*us*-名詞 (場所) 「…がいつもある所」と同じ構造ということになる⁶。

佐藤 (知) (2020) も動詞-*usi* (～する所) を名詞-*us-i* と同等のものと捉えており (p.222)、差し当たり筆者も「助動詞 *us*」という新たな範疇は考えないことにする。

ここまでの考察を一旦まとめておくと、*us* の基本概念においては《存在密度》が重要で、それが空間的に捉えられれば「多くある」の意味に、時間的に捉えられれば「いつも/頻繁に/習慣的にある」の意味になる。もちろん両方を満たした意味であっても構わない。後者には「いつも～する」の意味も関連づけられる。このようにまとめてみることで、[1] [2] [3] の語義をある程度包括した捉え方はできそうであるが、この暫定的なまとめを念頭に置きつつも、先に語義 [4] の問題について考えておこう。

3.6. usの所有動詞解釈の可能性

上記集計で [2] に含めたものには「ついている」という訳が当てられるものが多いが、「つける」や、中川 (1995) や田村 (1996) などに示されている「はく」やそれに類する (不随物を直接目的語とする) 用法の例は、『リスト』中には (訳語を見る限りでは) 見つからなかった。

ところで知里 (1956b) は、見出し語 *us* に関して存在物を目的語とする語義を挙げていない一方で、同書の他の箇所ではこれに相当する解釈を挙げている (例: 「水中から屹立する断崖」を表す *eorusi* は「水中に頭を突っ込んでいる者」、「岬」を表す *esausi* は「頭を浜に突き出している者」、「川岸が高い岡になって続いている所」を表す *opetkausi* は「尻を川岸に突き出している者」という解釈)。ところがこの *opetkausi* について切替 (改稿 2004) は、「自分の尻」を意味する再帰接頭辞 *ho-* でなく「尻」を意味する部分接頭辞 *o-* が現れていることから、ここでの *us* は「つけている」ではなく「ついている」と解すべきだとしている (p. 15)。このように、このタイプの地名における *us* については解釈が揺れるところである。

us も含めた存在動詞の意味に関してはもう 1 つ興味深い見解がある。例えば色内^{イロナイ}という地名を知里 (1956a) は「*i-ru-o-nay* それ=クマ [の]・足あと [が]・ごちゃごちゃある・沢」と説明する (p. 162) が、これに対して佐藤 (知) (2005) は、この場合の *o* を存在動詞ではなく所有動詞と捉えることを提唱している (その場合この例は「クマの足跡を持つ沢」と解釈される)。存在動詞の場合と所有動詞の場合の違いは、いずれも《対象》と《場所》という格 (意味役割) を帯びた項を取る枠組み (case frame) を持ち、対象が主語に立てば存在動詞、場所が主語に立てば所有動詞、というふうに説明される (pp. 172-3)。*us* についても、存在動詞の場合と「(靴を) はく」のような用法の違いが同様に説明される (ibid.)。

さらに佐藤 (知) (2008b) は抱合の観点から、一般に存在動詞とされている動詞の所有動詞解釈について論じている。抱合とは「名詞と動詞を合成して一つの単語を形成するプロセス」 (p. 225) だが、他動詞主語の動詞への抱合は一般的ではないという (ibid.)。従って、例えば *uray-us-nay* を「築がある沢」と解した場合、主語が他動詞に抱合される例外的事例ということになってしまう (存在動詞 *us* は他動詞である点に注意)。そこで *us* を所有動詞と考え、「やなを常在して持つ沢」と解すれば問題ないことになるわけである (op.cit.: pp. 275-6; 例は省略するが、他の存在動詞 (*o*, *oma*, *ot*, *un*) についても同様のことが述べられている)。

こうした見解に立つなら、*us* のような場所目的語を取る他動詞を含む地名のうち「X (存在物) + 動詞 + Y (場所)」型のものすべてに所有動詞解釈が適用され得ることになる。しかし、存在物が自らの意思・能力によって何らかの場所に存在・移動できるものの場合も、そうした解釈が妥当と言えるかどうかは疑問である (*us* 以外の例だが、*isopo-un-nay* (ウサギのいる沢), *aynu-oma-nay* (アイヌ (人間) がいる / 入っていく沢) など (訳は存在動詞解釈による))。

また、当該の形式を抱合による合成語とは見ずに、いわば関係節的な構造を含んだ名詞句が語彙化した「句単語」と見ることも可能であり (cf. 佐藤 (知), 2008a: p. 64)、その場合は上述の他動詞主語の抱合という問題は起こらないことになる。

us の所有動詞解釈についてはここでは結論を出せないで、存在動詞としての意味と「つける」や所有動詞的な意味との間に、格枠の共有を通した関連性を見出せるという点を確認するだけにとどめておく。

4. *us* 独自の意味合い

さて、佐藤 (2008b: pp.275-6) に改めて目を通して興味を引くのは、各動詞の意味説明である。*us* については、存在動詞の場合「～が～の表面に常在もしくは全面に密着する」(例: wakka-*us*-kamuy 「水 (wakka) の表面に常在する (*us*) 神 (kamuy)」)、所有動詞の場合「～が～を表面に常在もしくは当該面全面に密着するものとして持つ」(例は上述の uray-*us*-nay) とされている。同様に *o* は「～が～に入る」 / 「～が～を内部に持つ=～が～を入れる」、*oma* は「～が～に入る」 / 「～が～を内部に持つ」、*ot* は「～が～に湧くように出る」 / 「～が～を湧き出るように持つ」、*un* は「～が～に常在する」 / 「～が～を常在するものとして持つ」、といった具合である (各ペアは存在動詞 / 所有動詞という組み合わせ)。

筆者が追及する基本的意味と同じかどうかかわからないが、上記の記述はそれぞれの動詞独特の意味合いを伝えているように思える。ただし、どのようにしてそれらの意味合いが抽出され、あるいは根拠づけられるのかは不明である。

4.1. 《存在物》の種類

少なくとも本稿のテーマである *us* について、その特有の意味合い、言い換えれば *us* が表す「存在のあり方」をもっと探りたいのだが、そのために、*us* と共起する名詞が表す存在物 (もしくは事実上指示されていると考えられる存在物) の種類を見ることで、*us* の意味傾向の一端を見てみることにする。

4.1.1.

『リスト』から取り上げた *us* の例のうち、語義 [3] 以外のものについて存在物の種類に基づいて分類したところ、以下の結果となった (異なる分類が可能な場合を除いた数は () 内に示すことにする (以下同様)):

- ◆ *US* (計 78) 植物 48=61.5% (43=55.1%) [草木 47=60.3% (41=52.6%), 果実 2=2.6% (1=1.3%)], 地形物 12=15.4% [岩 (岩盤) 3=3.8%, 岬, 滝各 2=各 2.6%, 崖, 湿原等, 山, 砂浜, 単なる場所 (土地) 各 1=各 1.3%], 設置物 12=15.4% (11=14.1%) [漁 / 猟用のワナ類 6=7.7%, 物干し棚 3=3.8%, 木幣 2=2.6%, 目印に立てた木 1=1.3% (0)], 動物 6=7.7% (5=6.4%) [貝 3=3.8%, 鳥 2=2.6%, 魚 1=1.3% (0)], その他 3=3.8% (2=2.6%) [豊漁 2=2.6% (1=1.3%), 波 1=1.3%].

また、3. の冒頭で述べたのと同じ基準で『リスト』から取り上げた他の存在動詞 (*un*, *o*, *oma*, *ot*) を含む例について見ると以下ようになる:

- ◆ *UN* (計 40) 地形物 24=60% [川 7=17.5%, 岩 / 岩盤 4=10%, 島, 崖, 湿原等各 3=各 7.5%, 湖 2=5%, 滝, くぼみ各 1=各 2.5%], 動物 5=12.5% (4=10%) [魚 2=5%, 鳥, 兎各 1=各 2.5%, 蛇 1=2.5% (0)], 人間 / 集落 4=10%, 植物 (草木) 3=7.5%, 設置物 (ワナ類) 2=5%, 物質 (温泉水) 1=2.5%, その他 (川魚の産卵場) 2=5%.
- ◆ *O* (計 27) 地形物 8=29.6% [川 4=14.8%, 岩 / 岩盤 3=11.1%, 岩の穴 1=3.7%] 動物 6=22.2% (4=14.8%) [蛇 2=7.4% (1=3.7%), 貝 2=7.4% (1=3.7%), 鳥, 虫各 1=各 3.7%], 植物 5=18.5% (4=14.8%) [草木 3=11.1% (2=7.4%), 果実 2=7.4%], 物質 4=14.8% [水 2=7.4%, 硫黄, 灰各 1=各 3.704%], 設置物 (ワナ) 2=7.47%, 人間 1=3.7%, その他 4=14.8% (2=7.4%) [流木 3=11.1% (1=3.7%), 貝殻 1=3.7% (0)].
- ◆ *OMA* (計 31) 地形物 17=54.8% [川 12=38.7% (11=35.5%), 岩石 2=6.5%, 岸 2=6.5%

(0), 湿原, 単なる場所各 1=各 3.2%, 川の砂の流れ道 1=3.2% (0)], 植物 6=19.4% [草木 5=16.1%, 果実 1=3.2%], 人 3=9.7%, 設置物(ワナ類) 1=3.2%, 動物 2=6.5% (1=3.2%), ウニ, 魚各 1=各 3.2%], その他 3=9.7% (2=6.5%) [流木, 海波各 1=3.2%, 舟 1=3.2% (0)].

◆OT (計 16) 動物 14=87.5% (12=75%) [魚 9=56.3% (8=50%), 蛇 3=18.8% (2=12.5%), 鳥 2=12.5%], 植物(果実) 1=6.3%, 物質 2=12.5% (1=6.3%) [海水 1=6.3%, 温泉水 1=6.3% (0)], その他(焼いた魚) 1=6.3% (0).

植物の例は圧倒的に us に多い、動物の例の率は us よりも un, oma, ot の方が高く、とくに ot における魚の率が格段に高い、un, oma は地形物のうち「川」を存在物とする例が多いなど、いくつかの点が目につく。しかし、『リスト』中の確定度 B 以上のものを中心としているため母数が少なく、はっきりしたことは言えない。

4.1.2.

今回は、頻出地名を中心とした上で母数をもう少し増やすために、切替(改稿 2004)が引用している、羽田野正隆、「アイヌ語地名の史料における出現頻度」(『北方文化研究』No.20 (1989), pp.17-32)のデータを利用してみる。これは、幕末から明治期にかけてのいくつかの資料に現れるアイヌ語地名の、延べ出現数上位 178 までを挙げたものである(今回はその原本が入手できず、切替(op.cit.)が引用しているデータを参照することにした)。ここから、上記の 5 動詞を含む地名の出現総数と、それぞれの存在物の種類ごとの内訳は以下ようになる(ここでの集計にも「いつも～する」の例は含めない)：

◆US計 354: 植物 176=49.7% (145=41.%) [草/木], 地形物 111=31.4% [岸 29=8.2%, 滝 82=23.2%], 動物(カラス貝) 29=8.2%, 設置物 21 (5.9%) [木幣 10=2.8%, 物干し棚 11=3.1%], 無生物(石) 17=4.8%。なお()内は mose が動詞であった場合を除外した数。

◆UN計 88: 地形物(川) 45=51.1%, 動物 43=48.9% [魚 23=26.1%, 鳥 20=22.7%]。

◆O計 69: (人工物以外の)無生物 45=65.2% [流木 27=39.1%, 貝殻 18=26.1%], 設置物(仕掛け弓) 24=34.8%, または無生物(貝殻) 18=26.1%, 植物(木) 27=39.1% 設置物 24=34.8. (ni (木)の意味(「生えた木/流木」)の取り方によって数値が変わる)。

◆OMA計 149: 地形物(川) 97=65.1%, 設置物(仕掛け弓) 20=13.4%, 動物(鯨) 17=11.4, 植物(トリカブト) 15=10.1%。

◆OT計 66: 魚 66=100%。

次に、存在物の種類ごとに、使われている動詞の使用例数を出してみる：

◆植物計 218: US176=80.7%, O27=12.4%, OMA15=6.9%

または (ni 除外) 計 191: US176=92.1%, OMA 15=7.9%

または (mose 除外) 計 187: US=145=77.5%, O=27=14.4%, OMA=15= (8%)

または (ni, mose とも除外) 計 160: US145=90.6%, OMA15=9.4%。

(ni (木)の意味と mose の意味(「イラクサ(名詞) / 草を刈る(動詞)」)によって変わる)。

◆設置物計 65: O=24=37%, US21=32.3%, OMA20=30.8%。

◆無生物(地形物・設置物以外) 計 62: O 45=72.6%, US 17=27.4%

または (ni 除外) 計 35: O 18=51.4%, US 17=48.6% (ni (木)の意味によって変わる)。

◆地形物 計 253: US 111=43.9%, OMA 97=38.3%, UN 45=17.87%。

・川(川尻含む) 計 142: OMA 97=68.3%, UN 45=31.7%。

・岸など 計 29: US 29=100%。

・滝 計 82: US 82=100%。

◆動物 計 155: OT66=42.6%, UN43=27.7%, US29=18.7%, OMA17=11%。

・魚 計 89: OT66=74.2%, UN23=25.8%。

・鳥 計 20: UN20=100%。

・水生生物(魚以外) 計 46: US29=63% [貝], OMA17=37% [クジラ]。

これらを見ると、植物や、(とくに川以外の)地形物に関しては *us* との共起率が非常に高く、動物などの動くものに関しては *ot* や *un* の頻度が高い。やはり *us* の意味において《常在》の概念の比重は大きそうである。

4.1.3.

4.1.1., 4.1.2. の両集計を合わせて見ると、*us* と共起する地形物名詞の多くが、岩(岩盤)・岬・岸・崖・湿原・山など、陸地そのものの一部を表すものである(滝については後述)。また、植物は陸地そのものではないが、地に根差し、その土地自体の属性として存在しているともいえる。この《根差す(土地自体から生じている)》というのも *us* の意味の重要な特徴といえるかも知れない。対して動物は地面から分離されていて自由に動き、他の場所へ移動もする。知里(1956a)も「*us* はふつう固着しているもの(たとえば植物など)に用い、動きまわるもの(魚や鳥や虫など)には *o*, *ot* を用いる」と述べている(p.219)。ただし鳥については、今回調べた中では *un* の使用率が圧倒的に高い。

なお、地形物の中で特殊なのが川である。川は古来よりアイヌの世界観では生き物として捉えられており、かつ「海から発して山へ行く者」(知里,1956a: p.42)と捉えられている。それは「獲物を求めて山に行く狩人の道」であると同時に、「主食であるマスやサケが^{まっしぐら}藪地に遡って行く道」でもある(更科・更科,1976: p.431)。だから「魚のいる川(沢)」はしばしば *cep-un-nay* (魚が入っていく沢)のように表現され、川の方もまた *mak-un-pet* (山の方へ入っている川) (>^{マクベツ}幕別)、*sar-oma-pet* (ヨシ原に入っている川) (>^{サロマベツ}佐呂間別)のようにしばしば「内陸に入っていくもの」として表現されるのである。また、こういう場合の *un* の意味合いは、3.4. で触れた方向性を意味する格助詞としての用法とも符合するといえる。こうした動き・方向性に関わる意味合いは *us* には馴染まないであろう。

ここまでの説明に関して想定し得るいくつかの疑義についても考えておこう。i) 例えば *un* は「～出身」の意味で用いられることがある(*pana-un-kur* 川下地方の人)が、これはむしろ *us* に見出された《根差す》という意味に通ずるのではないか? ii) 動物のうち貝については *us* が多用されるのは何故か? iii) 川の一部である滝に対して *un* や *oma* でなく *us* が多用されるのは何故か? iv) 陸地そのものである島や崖に対して *un* が使われる事例(*rep-un-sir*>*repuysir* (沖の島)>礼文, *rep-un-ke-p* (沖の方へ削るもの=断崖)>礼文華など)はどう説明するのか?

i) について、出身や居住地を表す *un* は見方によっては、巣を拠点として飛び回る鳥の場合と同様に、ある土地を拠点として活動・出入りする《動き》に重点があるのかもしれない。

ii) について、*us* と共起する「貝」は圧倒的に *pipa* (カラス貝)が多いのだが、これが魚などと違って川底の石などに類した存在と捉えられていたと考える可能性はないだろうか。

iii) について、滝は、川を遡る上で障壁となる急な高低差のある「地点」、(崖などと同様に)陸地の一部としての地形と認識されていると考えることはできないだろうか。

iv) *repun* を含む例については、位置に関してそこへ至るための移動を想起するメトニミ的認知(「沖に行った所にある島」)や、海へ突き出た崖の形状をあたかも「海の方へ出ていく動き」のように見立てるメタファー的認知が関わっているといった説明が可能かもしれない。

4.2. usの基本的意味

細かく見ていくとまだまだ疑問の余地はあるかも知れないし、とくに同種の対象物に対して異なる存在動詞が使われる場合についても何らかの説明が必要であろう。筆者は、(各動詞独自の意味合いがあるとは言っても)「言及される対象物が動詞間で重なってはいけない」というほど強い限定が常に働くとは限らないと思うのだが、それでも存在動詞全般の体系性という観点からさらなる検討は必要になるだろうと思う。

このように課題は残るものの、本稿での考察からusの基本的意味を暫定的に次のように規定したい：《その場所に根差し、またはその場所そのものの一部や属性として、その場所を特徴づけるように目立った存在の仕方をしている》。これが、空間的密度の点から《群材》の意味にもなり、時間的密度の点から《常在》の意味にもなるが、いずれの場合も、それによって当該の場所が特徴づけられる、《目立った存在》という点も重要である。

5. 基本的意味を探ることの意義

1.2. でも触れたが、基本的意味説は、意味の多様性を否定した単義主義や、「本来の意味」の絶対不変性を言っているのではない。基本的意味は「具体的な文脈の多様性を支える潜在的資質」であり、「具体的な使用を通して…意味の変容にさらされる」ものでもある(佐藤(邦), 1992: p. 59)。今回、アイヌ語地名に現れたusの「基本的意味」について考えたが、これは地名という形で残されたものだけに、ある程度古い時代の意味を反映している可能性は高い。そして現実のアイヌ語の使用においては、意味変化を経た結果、地名における基本的意味からずれている部分もあるに違いない。しかし意味変化は、既存の意味とまったく無関係な新しい意味が突如沸いて出るのではなく、語がその既存の意味で使われる中で生じるものであろう。このことは、Ullmann (trad.esp.1986) のいう「語は元の意味を失うことなく新しい意味を獲得できる」(p. 269; 筆者訳) や、Taylor (1995) がプロトタイプカテゴリーについていう「新しい事物や経験は…カテゴリー体系を根本的に再編成することなく容易にプロトタイプカテゴリーに連合される」(p. 53; 筆者訳) といったこととも通ずるものであろう。

従って、地名におけるような古い状態を反映した語の基本的意味を探ることは、その語がこれまで意味変化を遂げてきた背後に働いていた基本的な発想を探り、ひいては現代語におけるその語の意味合いとの関連を探ることにもつながると、筆者は考える。

もう一点付け加えておきたいのが、新語形成に関してである。Hagège (邦訳 2004) は、「本来あった語彙の資源がはぎとられ、借用語が蔓延するようになった語彙の状態は言語の不安定化の一段階である」と述べ(p. 120)、社会の変化に言語を適合させる上で、古くからある語彙から派生語を作ることの有効性について述べている(pp. 199-200)。アイヌ語に関しては佐藤(知)(2012) が、新語の導入において「一般的なアイヌ語の語の構造に合致」することの重要性を説いている(pp. 42-3)。こうしたことが言語の存続にとって重要なのだとすれば、意味の面に関しても「こういう発想・捉え方だから(新語形成の要素として)この語が選ばれる」といった「アイヌ語らしさ」も重要になってくるのではないだろうか。

註

- 1 *us* に関しては動詞としての意味が希薄化した形式的要素としての面を重視する立場もあり得るので (本稿 3.4. 参照)、表題では敢えて「形態 *us*」と称している。
- 2 本稿では基本的に、[s], [ʃ] 音にあたるものは *s* (アイヌ語ではこれら 2 音を音韻的には区別しない)、[j] 音にあたるものは *c* で表記するが、引用に際しては、引用元の表記を尊重して *sh*, *ch* も適宜用いることがある。
- 3 確定度は、以下の 4 条件—①音、意味、文法などアイヌ語として適切と思われる。②地理的条件や事実関係等解釈に妥当性があり、また、地名化される必然性があると思われる。③根拠となった場所や地形、事実等がほぼ確認できる。④従来の諸説に照らし適切であり、また一定程度の定説となつていられると思われる—に関して、①~④全てを満たす場合が A、少なくとも①及び②の両方を満たすものが確定度 B、A 及び B 以外のもの、及び諸説があり特定が困難なものが C である。
- 4 Y-*us*-X 型のものについて、例えば *nutap-ka-us-pe* [山_湿原の上] と表示すると「山のある湿原の上」と誤解される恐れがある (実際には「湿原の上にあるもの (=山)」という意味) が、このような場合も便宜上、単純に [X_Y] 式で存在物と場所の組み合わせを示すにとどめる。
- 5 例えば更科・更科 (1976) は、季節によってシカ猟の方法が決まっていることを示す、アイヌの「鹿狩り暦」の例を紹介している (pp.273-4)。
- 6 ただし切替自身は、*us* が助動詞か単なる形式的結合要素である可能性も含めて、結論は出していない。

文献

- 知里真志保 (1956a) 『アイヌ語入門—とくに地名研究者のために』(復刻版 1985) 北海道出版企画センター。
 —— (1956b). 『地名アイヌ語小辞典』(復刻版 1984) 北海道出版企画センター。
 Hagège, Claude (邦訳 2004). 『絶滅していく言語を救うために』白水社。[原著: Hagège, Claude (2000). *Halte à la mort des langues*. Paris. Éditions Odile Jacob.]
 北海道環境生活部 (編) (2007). 『アイヌ語地名リスト』北海道環境生活部。
https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/new_timeist.html より取得 (2018.10.27).
 金田一京助・知里真志保 (1936). 『アイヌ語法概説』岩波書店。
 切替英雄 (1984). 「アイヌ語の名詞句の構造と合成名詞」『言語研究』86, 105-121。
 —— (改稿 2004). 「頻出アイヌ語地名の形態論的構造」私刊。
<http://anrur.la.coocan.jp/cimeinobunpoo.pdf> より取得 (2020.7.15) [原著: 切替英雄 (2000) 「頻出アイヌ語地名の形態論的構造」『アイヌ語地名研究』3, 105-142.]
 —— (改稿 2005). 「山田秀三のアイヌ語地名研究」私刊。
<http://anrur.la.coocan.jp/otasut.pdf> より取得 (2017.4.8) [原著: 切替英雄 (2005) 「山田秀三のアイヌ語地名研究」『北海道立アイヌ民族文化研究センター-研究紀要』11, 200-218.]
 永田方正 (1891 (復刻 1984)). 『北海道蝦夷語地名解』草風館。
 中川裕 (1995). 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館。
 更科源蔵・更科光 (1976). 『コタン生物記Ⅱ』(復刻版 2020) 青土社。
 佐藤邦彦 (1992). 「語単位: 記号の両面の対応とズレをめぐる」『スペイン語学研究』7, 59-78。
 —— (1997). 「基本的意味説と認知意味論」『スペイン語学研究』12, 67-88。
 佐藤知己 (2005). 「アイヌ語地名研究と言語学」『アイヌ語地名研究』8, 153-180。
 —— (2008a). 「アイヌ語千歳方言における合成名詞の構造」『北方人文研究』1, 55-68。
 —— (2008b). 『アイヌ語文法の基礎』大学書林。
 —— (2012). 「アイヌ語の現状と復興」『言語研究』142, 29-44。
 —— (2020). 「アイヌ語における文法的カテゴリーの転換について: 語と句、動詞と名詞の相互関係をめぐって」『北方言語研究』10, 219-230。
 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』草風館。
 Taylor, John R. (1995)². *Linguistic categorization*. N.Y., Oxford Univ. Press.
 Ullmann, Stephen (traducción española 1986). *Introducción a la semántica francesa*. Madrid, Consejo Superior de Investigaciones Científicas. [原著: Ullmann, Stephen (1952). *Précis de sémantique française*. Berne, A. Francke.]
 山田秀三 (1994) 『北海道の地名』(復刻版 2000) 草風館。